

# 巻頭言

2009.3月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 一年の旅

茗溪塾塾長 宇野 雅春

受験は考えてみると、一つの長い旅に似ています。山を越え、谷を超え、目指すゴールに向けて、時には走り、時には立ち止まり、そして時には黙々と苦しさにも耐えながら歩き続けるそんな毎日。やっと、旅が終わり、その旅を振り返る時期になりましたが、同時に次の旅がスタートしています。入試の制度が変わり続け、その分内容が増えるために、受験指導は年々密度が濃くなっている印象です。つまり、入試が多様化し、対応するにはたくさんの違った種類の努力が必要になっていきます。1人1人が自分の受験について「理解」することが重要になってきています。いつものことですが、第一志望を逃した生徒には悔いが残ります。失敗は成功の元といいますが、あとちょっと何が足りなかったのかということに思いがいきます。成功も一面的に総括すると、あたかも、指導者の能力によってもたらされたかのように決め付けられることがあります。当然のことですが、生徒の努力と先生の指導がうまく呼応しあうこと抜きには「成功」はありえません。言いかえれば「相乗効果」ということです。生徒の側からの積極性が引き出せたときにこの「相乗効果」が発揮されます。ですから、この積極性が引き出せなかったことには、「悔い」が残ります。もっと強引に引っ張ればよかった...というようなことです。

「相乗効果」はお互いの違いを認め合うこと（歓迎すること）から始まります。スタート時点でお互いを認め合う「認識」が重要ということなのです。「この先生苦手!」とか「やる気のない生徒は我慢できない!」といった先入観から相乗効果を逸してしまうことがあります。生徒と先生、先生と父母、生徒と生徒、生徒と父母、先生と先生すべての関係が相乗効果を作って大成功する場合と、そうでない場合があるのです。一年間をふり返ると、そうしたことで反省することが多いものです。「自分が正しい!」と思いつくことも、多分この相乗効果を妨げることになります。お互いを理解し合い認め合うことの大切さを改めて思います。「考え」や「思い」をきちんと理解しあうこと。長年の経験を踏まえると「受験の成功」はそこから生まれてくると断言できる気がします。

新学期のうちは全体に、張り切りムードがあります。これが気候が良くなってくるとどんどん中だるみ傾向が出てきます。中学生や高校生は、大方「部活動」に引っ張られることになります。塾に通うのが、やっとということ。そんな状態の中では成績が上がるということは難しいものです。でも、後で本当に分かることなのですが、受験は生涯の中でも最も未来に関係する重大事です。日常生活の中でのたくさんのこと、部活や人間関係も大切なことですから、「両立」ということが課題なのです。社会に出てからも「仕事」と「家庭」という課題があるように、「両立」させることが、大きな「生きる力」なのだと思えます。ここでは、「優先順位」が課題になります。

今年の1年の旅も、たくさんの思い出と、たくさんの力を与えてくれました。しばし悔やむ時期もありましたが、立ち止まる暇はありません。何とか立て直して切り替えていく必要に迫られています。思ったとおりの結果にならなかったひとは、自分のこととして受け止めることで、次の成功を得られるはず。自分以外のものに責任転嫁すると、同じ過ちを繰り返すことになりません。

いつも教えていた生徒やクラスがもうそこにはないというだけで、寂しい気持ちになりますが、あたらしく出会った生徒たちと次の旅のはじまりの一步をしっかりと踏み出したいと思っています。後戻りのできない一回限りの「旅」の始りです。